
tokonatsu

次郎丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

tokonatsu

【Zコード】

N2738D

【作者名】

次郎丸

【あらすじ】

「ごく普通のサラリーマンが、一人でハワイへ旅行に行つたときの話です。

ハワイ、そこは常夏のビーチ。訪れる人々がそれぞれに酔いしれる楽園。普段は東京の乾いたオフィスで毎日を過ごす私も例外ではなかつた。

ハワイに一人旅。

会社の同僚にはずいぶん馬鹿にされたが、いやいや、これはこれでいいじゃないか。ビキニの女に、観光客のはしゃぐ声、透き通るような「バルトブルー」の海に、白い雲、青い空。日本じゃ絶対味わえない特別な世界がここにある。素晴らしいじゃないか。もし、家族なんていたら大変なんだろうな。常にトイレに気を使って、食べ物探して・・・大変そうだ。

そりや、家族がいれば、にぎやかで退屈はしないだろうけど。

私はこの旅行で、一人の女性と知り合つた。外国人じゃなく、日本人だ。英語が喋れない僕に、外国人の友達ができるはずもないが。それはそうと、その女性とは、とあるカクテルバーで出会つた。空港の割引パンフレットに掲載されていたバーだ。店内にはブルーとオレンジのライトアップがされていた。ハワイアンなBGM音楽が流れていたりして、雰囲気があつた。人気があるらしく、僕が店についた時には行列ができていた。店内からは、かすかに音楽が聞こえるが、行列に並ぶ人々の声が狭い白壁に反射して結構うるさい。さすがに退屈だったので煙草に火をつけようとしたとき、女性が後ろから声をかけてきた。私は、そのやさしくしつかりとした声に安堵感を覚えたのと同時に、端正な顔立ちで、いわゆる美人の彼女が話しかけてくれたことに胸が躍つた。向こうにその気はなかつたと

思うが、私は一目惚れしてしまった。

彼女と話しているうちに。彼女が沖縄出身だということ、プロのモデルマンで世界中を旅しているおかげで、英語のほかに、フランス語やドイツ語などがしゃべることができることなどを知った。どれも私にはない魅力的なものに感じ、ますます彼女のことことが好きになった。

彼女はこのカクテルバーに何度か足を運んでいて、おすすめはプレーファというトロピカルカクテルだそうだ。ぜひ飲んでみたかったが、それより私は彼女と隣の席で話がしたかった。

しかし、結局席は遠く、それ以上話せなかつた。それでも、僕と彼女は偶然帰国する日が一緒だったので、メールアドレスを交換して、その日はホテルに帰つた。彼女は仕事で来ているので、そんなに会えないかもと言つていたが、せめてあと一回だけでも会いたかつた。数回のメールのやり取りの末、私たちが帰る前日、夕方にあのバーで会えることになつた。

さて、一日の空白ができてしまつた。できないサーフィンを楽しんだり、土産物を買つたりしてハワイを満喫した。ある宝石店に立ち寄つたときに一つ、あやふやなものを買つた。もし彼女といい感じになつたときのためにプレゼントしようと思い、青い真珠のネックレスを買つた。もし彼女と上手くいかなかつたら、そうだなあ、ちよつと気になる会社の子にでもあげるか。

とにかく青い真珠のネックレスの行方はどうなるか、それにかかつていた。

カメハメハ大王よ私に幸あれ！

待ちに待つた帰国前日の夕方、私は気合を入れて例のバーへ足を運んだ。今日は行列ができるいない。彼女もまだ来ていないようだ。まだ約束の1時間前。ハワイで時間の使い方を間違えたのは今回ば

かりではない。彼女が来るまでの時間は、さまざまにカクテルを試し飲みして過ごした。ただしカクテルに酔つてこのチャンスを台無しにしない程度に。

カクテルを一、二種類試した頃、日本人の初老の男性に声をかけられた。

「楽しんでますかな。」

気さくに話しかけてきたその初老の男性との話は大いに盛り上がった。

日本の会社の話、ハワイの海がきれいだという話、ハワイの人々の悪口なんかも話した。初老の男性は定年で退職し、奥さんと一人でハワイに旅行に来たという。夫婦で水入らずのハワイ旅行。なんて素敵な夫婦だろう。

この人と話しているうちに、私にとつてハワイの楽しみの一つは、ハワイで出会つた日本人との交流だと感じた。英語をしゃべることができたなら、もつと楽しいだろうけど。私はそれからしばらくその男性他愛もない話をしていたが、残念なことに、初老の男性は、奥さんとの時間を楽しむために帰つて行つた。

しかし、ほどなくして、

「待つた？」

と懐かしい声がした。全然、と嘘をついて彼女のために椅子を引いた。

「ごめんね。仕事が少し長引いちゃつて。でも、おかげさまで満足のいく写真が撮れたの。見る？」

「うん、見たい。」

彼女は、前に会つた時にも持つていた青いエナメルのバックから写真を数枚撮り出した。

バーの照明は薄暗いので、鮮明には見えないが、彼女もそれを承知で見せてくれた。

「きれいだね。これカメ？」

「カメじゃないよ。マンタ。かわいいんだから。」

君の方が可愛いよ。

「ハワイよく来るの？」

「うーん、ハワイに関する仕事が入ればね。今回たまたま夕方の浜辺が私のテーマだったから。」

「そつか。いいなあ、楽しそうで。」

「うん。私も今の仕事に満足してる。そうだ、写真撮つてあげようか？普段あまり人はとらないんだけど。」

「本当に？うれしいな、プロのカメラマンにとてもらえるなんて。写真を撮つてもらつた瞬間、正直、彼女に撮つてもらうことよりも、彼女と一緒に写りたいと思つていた。とはいえ、カメラマンである彼女にそんなことを言えば機嫌を損ねると思い、黙つていた。写真を撮り終えると彼女は、

「ねえねえ。すごい景色がきれいなところがあるんだけど行かない？」

といった。私は彼女からの誘いを断るはずもなく、言ひ通りについて行つた。

私たちはバーを出て様々な店が立ち並ぶ浜辺を歩いた。バーにいた時の喧騒はまるでなく、遠くで夕食を楽しむ人々の音がする程度だ。ロマンチックと言えば聞こえはいいが、二人の間に会話はなかつた。私の頭の中で、何を話したら盛り上がるのか必死で探していた。

「ハワイって本当何もかも素敵よね。でもハワイの人ってかわいそう。」

「何で？」

「だってこれが当たり前になっちゃうんだもん。真っ白な宝石みたいな砂浜に、魚がはつきり見えるきれいな海。でも、もしハワイの人人が日本に来たら、今の私たちと同じ様な気もちになるのかしら。」

「・・・。」「

「どちらにしても私にとって、ハワイは永遠の夢の場所だと思うの。現実なんだけど、現実の枠に入ってしまうとつまらなくなっちゃう。だからこそ素敵なんだけど。」

そうだ、私だつてそれは強く感じている。この世界を現実とすれば、私が明日から始める元の日常の世界は一体何なのか。私がハワイで彼女と出会い、話し、楽しんできたことも、すべて現実の世界へ持つていいものなのか。

そういうひしているうちに彼女の言ひ、景色の奇麗な場所に着いた。そこは、小高い場所からビーチを見下ろせるようになつていった。ビーチには、寄り添う二つの人影が点々としているほか誰もいない。真っ赤な夕日照らしている海は、旅情を誘つた。

ああ、常夏のサンセット。

私はその景色に見とれ、彼女はカメラのシャッターを切つていた。太陽が沈み、店明りが目立つ頃には、私の心中は、とても澄んでいた。

私たちはその後、海の見えるレストランのバルコニーで彼女と、ハワイで最後の晚餐を楽しんだ。

「じゃあね。」

「うん。もし、またハワイで会つたら」「ひして一緒に食事しよう。」

「いいわ。じゃ、それまで元気でね。」

「うん、それじゃ。」

帰り道、私は青い真珠のネックレスをヤシの木にかけ、翌日ハワイを後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738d/>

tokonatsu

2011年1月18日17時00分発行